

九 年前、長崎の伝統野菜
の灯が消えることを心

配していた中尾順光さんのその
後を訪ねた。

二〇二五年秋、中尾さんの姿
は長崎市内の小さな畑にあった。

二十代から四十代の若い世代
が中心となり、長崎で景観ま

ちづくり活動を行う市民団体
「長崎都市・景観研究所」。

彼らは斜面地にある空き地を
農園として活用しようと、

「さかのうえん」を運営し、
長崎白菜（唐人菜）、辻田白菜、
長崎たかな、長崎赤かぶ、紅大
根といつた長崎の伝統野菜を栽

培している。

代表を務める平山広孝さんは、
伝統野菜の栽培は難しく、最初
はうまく出来なかつたと話す。

「でも、中尾さんに丁寧に教え
ていただき、だんだん上手になつてきました（笑）。長崎の伝
統野菜は主に中国から伝わった
ものです。この辺りは、かつて
は唐人屋敷の後方に広がつてい
た畑でした。江戸時代はきっと、
ここで伝統野菜が作られていた
のではないかと思います。斜面
地の活用だけでなく、歴史をつ
ないでいくという点でも、この
場所で伝統野菜を栽培する意義
はあると考えています」。

もう一度、会いたい

長崎の 伝統野菜を 継承する

中尾順光さん

長崎赤かぶ



辻田白菜

（上）

紅大根

（下）



長崎伝統野菜育成保存会の会長を務める中尾さん

平山さんは、伝統野菜を知つ
てもらうための活動もしている
という。「長崎の雑煮といえば、
唐人菜ですが、昨年の大晦日には、
商店街の飲食店と協力して、

乾燥し、お土産として販売する
ことも始めました」。中尾さん

は、若者たちの情報発信力に驚
くとともに、彼らとの出会いを

きっかけに、人と人がつながり、
伝統野菜の種が広まつていくの

を実感していた。「『伝統野菜



No.30



若者たちと一緒にいる中尾さんは、本当に楽しそうだ。「私は彼らのまちづくりへの思いにも強く共感しています。空き家や空き地問題をこうしたアイデアで解決に導き、地域の人たちにも喜ばれるなんて、素晴らしいですね」。

斜面地を活用した住宅街の畑。
長崎の伝統野菜は意外な形で受け継がれていた。



長崎市中新町には「さかのうえん」として活用している空き地が5ヶ所ある。
彼らは、坂のまち・長崎を満喫しながら畠仕事を楽しんでいる。



平山さんは「伝統野菜への強い
想いや食の大切さを中尾さんに
教えていただきました」と話す。